

2026年3月25日

報道機関 各位

産学地域連携で挑むシカ獣害

対馬で先端捕獲システムの実証実験開始

長崎大学環境科学部の服部充准教授は、シカが推定4万頭以上生息するとされている対馬において、シカ捕獲の効率化を目的とした囲い込み罠の実証実験を有限会社 AID（福岡県北九州市）と対馬材木事業協同組合（長崎県対馬市）と協力して2026年3月に開始いたしました。

ニホンジカは、林床の下層植生の採食や樹皮剥ぎにより森林生態系に大きなダメージをもたらします。このダメージは、森林内の生物多様性の減少をもたらすだけでなく、土壌の保水能力を喪失させ災害を引き起こすことが知られています。これまでニホンジカの狩猟にはくくり罠が主に用いられてきましたが、一頭ずつの捕獲しかできず、その効率は非常に悪くなっていました。

そこで今回、一度に複数のシカの捕獲を目指した大型の囲い込み罠の実証実験を対馬市にて始めました（写真1）。この囲い込み罠を利用することで、一度に複数頭の捕獲が可能になり狩猟人口の減少による捕獲効率の低下の改善につながる可能性があります。

加えて、実験で用いる囲い込み罠は、罠の入り口をシカの侵入を感知してセンサーによって開閉を行い、罠が閉まったことがスマートフォンなどへ送信されます。シカの捕獲が遠隔地においても確認することができ（写真2）、これまでに必要であった見回りの手間もなくすることができます。



写真1：設置した囲い込み罠の様子（空撮）



写真2：遠隔カメラで撮影されたシカ

本取り組みにご関心をお持ちいただき、取材・報道等にて広くご紹介いただけましたら幸いです。

【本リリースに関するお問い合わせ先】

長崎大学環境科学部 准教授 服部充

電話：095-819-2759 E-mail: mhattori@nagasaki-u.ac.jp